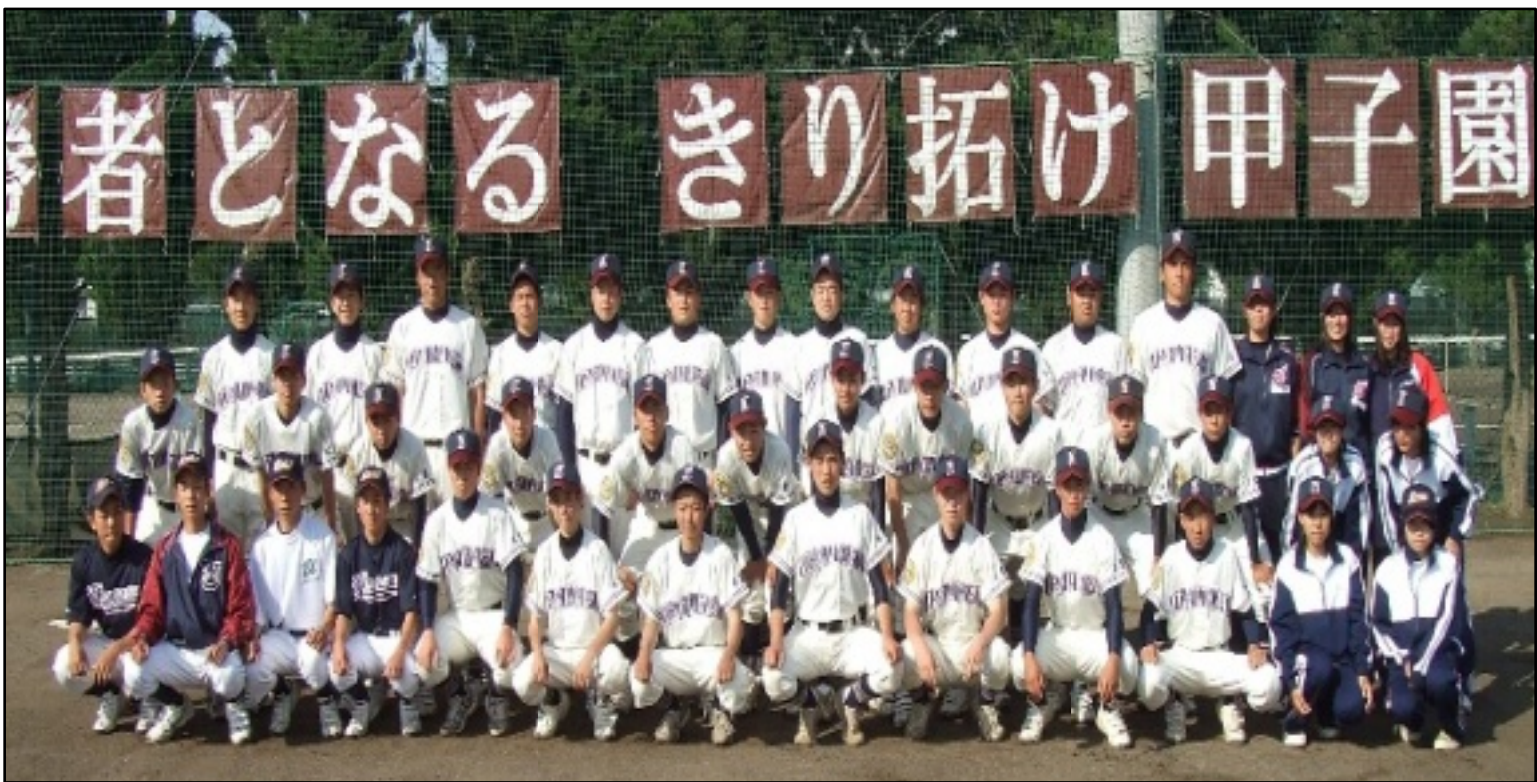


浦安

(うらやす 千葉県)

学校崩壊の危機から復活！！
日々の鍛練で培った人間力と
自慢の守備力が強み。
この夏、目標の日本一に挑戦する。



整列をする選手達。地域に初めてできた県立高校として親しまれている同校。その活躍を楽しみにしている近隣住民、OB、OGも多い。

今年の春季千葉県大会で浦安高校がベスト4に進出したこと。それは浦安市長が市の広報紙で取り上げるほど注目された出来事だった。東海大浦安、成田、木更津総合など全国でも名の知られた強豪校を破り、敗れた準決勝でも春季関東大会で準優勝の習志野と1-3の好勝負を演じた。それだけに十分価値のあるものだと言える。

同校は1973年に初めて浦安市にできた県立高校。浦安という漁師町で生まれ育った豪快な性格の生徒を中心に、習志野や八千代からも生徒が集まり、みんながまじめで勉強に部活動にと頑張っていた。

創立と同時にできた野球部は1年目ベスト32、2年目ベスト16という結果を残し、地域からも期待された存在だった。

野球部のOBには小川史氏(元南海ホークスなど)、服部裕昭氏(元阪神タイガース)といったプロ選手もいる。

また、浦安を舞台にした人気漫画『浦安鉄筋家族』の作者・浜岡賢次氏も同校出身者だ。



上 / 以前は内野まで芝で覆われており、水はけも悪く、野球に集中できる環境ではなかった。だが、大塚監督がOB達と協力してきっちりと整備し直し、今では立派なグラウンドになっている。



上 / ノックを打つ大塚監督。
右 / 秋から急成長を見せた左腕・会沢投手。



学校消滅の危機を乗り越えて

しかし同校もその後は波乱の時代を経験した。学校が荒れ、暴力事件も起きるようになった。多くの生徒が授業に参加しない、授業中に教室にゴミを捨てるなど、まるでドラマ『スクールウォーズ』のような状況が15〜20年ほど続く。高校入試では定員割れが続き、野球部は人数が揃わず出場辞退ということもあった。あまりの状況に一時は学校が無くなるという噂まで出た。

そんな状況を気にしていたOBや教師は再生のために、生活指導と部活

しかし同校もその後は波乱の時代を経験した。学校が荒れ、暴力事件も起きるようになった。多くの生徒が授業に参加しない、授業中に教室にゴミを捨てるなど、まるでドラマ『スクールウォーズ』のような状況が15〜20年ほど続く。高校入試では定員割れが続き、野球部は人数が揃わず出場辞退ということもあった。あまりの状況に一時は学校が無くなるという噂まで出た。

動に力を入れることを考えそれに合った人物を探す。白羽の矢が立ったのが、同校OBで浦安中学の野球部を強豪校に育て上げた大塚監督だった。

「当初は生徒との戦いだった」と2003年の就任当時を振り返る大塚監督。生活指導の担当として校門での頭髪検査を行うなど、基本的な所から変革をした。その結果少しずつ指導する側される側という立場が明確になり始める。それを契機に同校の風紀は徐々に改善されていった。

現在は部活終了後にスピチの発表も行う。自分が考えていることを整理すること、大舞台でも堂々と自分の意見を言える精神的な逞しさを育てる狙いがある。

現チームの主将・菅原選手は、中学生に対する部活動紹介などの場で、ハッキリと発言しているという。そういった内面の成長は、「周りに『応援したい』と思わせるチームになること」にもつながっていく。

ヒット以外でもいかに貢献できるか

今年のチームは守りが固

そんな時に行ったメンタルトレーニングの講習会で講師が言った「日本一を目指す」と「日本一を目指す」という話にヒントを見つめる。

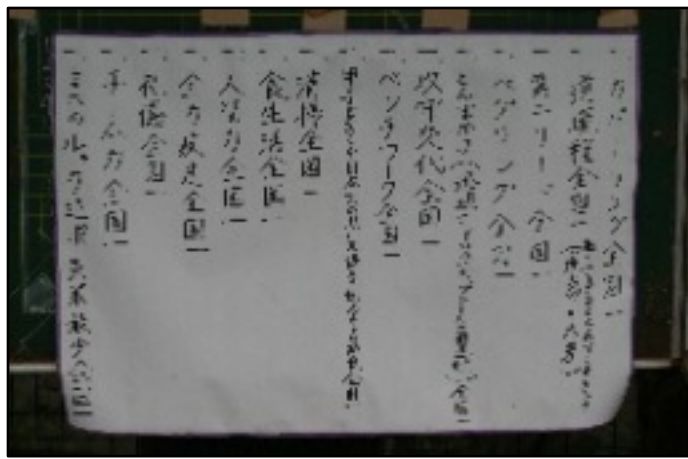
「本気でやらせるには、一番を目指しそのためにあらゆる努力をすること。それが人間性を磨き、野球もできる人材を育てることにもつながると思った」と言う大塚監督。

メンタルトレーニングを練習に取り入れてすぐの春の大会では、格上の私立高校2校を破るという結果を出した。

そんな時に行ったメンタルトレーニングの講習会で講師が言った「日本一を目指す」と「日本一を目指す」という話にヒントを見つめる。

「本気でやらせるには、一番を目指しそのためにあらゆる努力をすること。それが人間性を磨き、野球もできる人材を育てることにもつながると思った」と言う大塚監督。

メンタルトレーニングを練習に取り入れてすぐの春の大会では、格上の私立高校2校を破るという結果を出した。



左上 / 日頃から目標である日本一を意識し、きちんとした人間であり続けるための目標を書いた張り紙。

右上 / 雨でも投げられるようにシートの敷かれたブルペンで投げ込む投手陣。

右下 / 掴む瞬間までボールを見てキャッチをしようと意識してノックを受ける選手。

左下 / 選手一人ひとりが現時点での目標を書いた黒板。

春の大会で活躍した左腕エースの会沢選手は元々投手ではなかったが、秋に打たれた悔しさを胸に冬場に練習を重ねた。春になると球速が伸びて変化球の緩急が使えるようになる。そして腕が遅れて出てくる打ちにくいフォームになり、牽制も上達。急造投手に近かった彼が一冬越えてしつかりと「投手」に成長した。

い。掴む瞬間までボールを見てキャッチすることを心がけて磨かれた守備力、メンタルトレーニングなどで鍛えられた心の強さがある。

大塚監督がターニングポイントとして挙げた試合(春季プロック予選。対東海大浦安戦9-0)では、試合には快勝したが今ままであまり格上の相手に勝った実績がないため終盤にあわててしまった。しかし、その経験もあってかその後はしつかりと試合を運べるようになってきた。

その試合をきっかけに躍進した春の大会はほとんどの試合で先制点を入れ、粘り強く試合を進めることができた。県大会準決勝までのチーム打率は19.6。だが大塚監督は「ヒットでない8割でいかにチームに貢献するかが大事」という。打席での粘り、走者を進める打撃などヒットでなくても、相手投手にダメージを与える方法は多い。

捕手の齋藤選手は高校で捕手

なった。家が遠くても誰よりも早く来て練習をする。投手とよく話し合い、色々な話を聞き普段からプラスになることを吸収する。そのような地道な努力もあって、リード面などで成長を見せ、春の大会では投手陣を支えた。

バツテリーはともに大きな伸びしろを持っている。

左翼手の柳澤選手は50メートルを6秒ほどで走る俊足で、逆方向に伸びる打球を打てる。大塚監督も「彼が伸びれば打線がレベルアップできる」と期待するひとりだ。

普段のスピーチやメンタルトレーニングの成果もあってか、八木八木と話す選手が多い。同校野球部に入ったことにより「今まではだらしなかったが、人間として成長できた」という声もあり、選手たちも人間的な成長を自覚出来ている。普段の練習ではミスをしたら大声でどんだん注意するなど、選手一人ひとりがチームのために良い雰囲気を作るように心がけているという。

そんな浦安高校の夏の大会初戦は、千葉英和对千葉工の勝者との対戦。千葉都市モノレール「スポーツセンター前」駅近くの千葉県野球場で、7月13日の11時30分から開始予定となっている。